



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.155
2016.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

50

「福島中学校に 木曾教育会活動に学ぶ」 (S59～61 1984～86)

埋文センターも2年で部長も二人調査員も増加し調査も軌道に乗った。私の県職員としての立場が取れないこともあって学校に帰ることになり、木曾郡中心校の福島中学校に転勤となった。ここでの3年間は私の勤務した学校の中では一番つらく大変だった。

木曾福島町は木曾郡の郡都意識が強く、学校でも郡下一であるべきだという方針での指導が強く、いい加減な私にはついていくのに苦労した。中世の後木曾氏が居館と城をこの地において木曾を支配した。江戸時代は山村氏が代官となり屋敷をこの地に置き、中山道の福島関所がここであってそれも所管していた。この歴史的背景で太田水穂が『山蒼く暮れて夜露に灯をともし 木曾福島は谷底の町』と歌われる谷底の空の狭い町が木曾郡の中心地となった。裁判所・地方事務所・木曾病院・木曾警察署等官公署が狭い町中にあり、鉄道中央西線福島駅に全ての特急が停車する。木曾教育会館も木曾川沿いにある。玄関前に藤村の『夜明け前』原稿碑が、裏には芭蕉句碑もある。別棟として土蔵を改造した『木曾郷土館』があり、一階には考古資料を展示している。

鳥居竜蔵先生は大正10年下伊那郡の考古学調査を終え、木曾教育会の招きで神坂峠を越えて木曾郡に入り、福島小学校に集められた遺物を見、『土器・石器』の講演をした。13年に『西筑摩郡考古資料調査』の冊子をまとめた。郡としての考古学調査は戦後で、藤沢宗平・樋口昇一先生らの調査からである。教育会会則に『郷土文化に関する必要な研究調査』が活動目的の一つにあり、郷土調査を進めてきた。昭和29年郷土館が設立され、郷土館部と郷土調査部とが共同して地域の調査を行った。

地域への働きかけの一つに『動く郷土館⇒郷土見

学遠足』を1964年から始め、現在も継続されている。郡内各町村を幾つものテーマを決めて委員が項目を分担してテキストを作成し、それをもとに当日見学案内をした。そのテキストを基に『木曾一歴史と民俗を訪ねて』という木曾を紹介するガイド本を1968年に刊行し、版を改訂し現在四訂となっている。木曾を最も理解し内容のある本として好評である。さらに地域の人達の郷土理解と研究への足場として『郷土文化に関する研究会』を74年に開催し、是を発展させて『木曾郡文化財保護連絡協議会』として80年から今日に継続開会している。教育会が主導して郷土への働きかけは他地域では見られないものである。私も委員の一人として活動した。

郷土館では研究紀要を65年から74年まで6号刊行している。充実したよき時代であった。金銭的に無理な状況でガリ刷り冊子で対応した。74年『郷土館資料目録』 82年『木曾備要その1』 87年『木曾人物誌 木曾の文学碑』 93年『木曾教育会郷土館所蔵目録』がそれである。

郷土に関心がある教師を中心に呼びかけて木曾郷土文化研究会を作り、会誌『木曾』を刊行したのは1964年でした。会員が出版費を分担して継続発行してきたが、91年まで24号までやっとなりました。最終号25号を刊行したのは2005年。地域に会員組織が出来なかったことが地域郷土誌を継続発行できない原因で、木曾の持つ地域性の弱さでした。

木曾教育会活動への協力として、一つは郡図改訂版の作成、二つは教育会百年誌の編集・執筆、三つは1936刊行の『木曾郷土図譜』の復刻がある。いずれも木曾生まれでない自分にとっては勉強になった。

郷土館委員として地域の歴史・民俗を学んだことで、仲間と『図説木曾の歴史』1982 『木曾の昭和史』2000 『木曾の原風景』2005 『木曾路大紀行』『権兵衛街道』2006等に関わらせてもらった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲雑誌『木曾』



▲郷土調査部の仲間

目次

■田舎考古学人回想誌 福島中学校に 木曾教育会活動に学ぶ 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第148回) 田中 信 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第13回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「江戸を掘る 近世都市考古学への招待」 石森 光 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第13回) 岡田 淳子

⑬甲野勇先生と国立音大

甲野先生は、講義をすることが難しくなり復帰は望めないからと、教鞭をとっていらした国立音楽大学の後任に私を推薦してくださいました。

甲野先生が男女を差別されなかったことの証しであり、昭和60年代女性が大学の専任教員に採用されるのは、家政学関連以外は非常に少なかったため、私にとっては千載一遇の筈だったが、反面とても悲しいことでもあった。最後に先生のお宅に伺った時、もうお会いすることは叶わなかったが、私が後任に決まったことを「良かった」と安心されていたという。私の胸には込み上げるものがあった。

甲野勇先生は、八幡一郎、山内清男両先生と共に東大人類学選科で学ばれ、昭和初期縄文文化研究の三羽烏とうたわれた。武蔵野博物館から武蔵野郷土館へと、屋外博物館の充実を目指された一方、慶應義塾大学で石器時代を講じられた。戦後、国立に居を移され、国立音楽大学の専任教員として迎えらる。先生は常に精神的なゆとりと知識の広さが感じられた。戦後まもなく発刊された『縄文土器の話』にもそれは現れており、誰もが興味を持つ身近な学問をと心がけていらした。昭和27年、講和条約発効の日、たまたま武蔵野博物館に伺うと、「嬉しい記念日ですからお祝いしましょう」と、吉祥寺に出てココアをご馳走してくださり、乾杯した。

先生は決してノンポリではなかった。私を大学に推挙してくださいましたとき、「2月11日には、この日が建国記念日としては何の理由もないことを、毎年必ず講義の中で話します」と、日本考古学者としての真骨頂を示された。先生のように出来なくても、私もそれを心掛けようと思った。

音楽大学は、人をゆったりさせる空気に満ちていた。ウイーンから帰国された有馬大五郎学長はテノールで歌いながら廊下を歩いていらした。1967年、日本は学生運動の真ただ中だったが、団交のため理事長を待つ学生の集団から、まるでオーケストラのような器楽演奏のメロディーが流れ、それだけで尖った心の角が取れた。理事長は、電気や水道、電話などの無駄を省けば学費値上げは緩和されると回答、学生たちはそれを守ると約束、それが実行されてその時の値上げは無いままに収拾した。

私は一般教育担当なので、日本の民俗行事や、楽器を主とする世界の民族文化、考古学関係では石器時代の楽器などの講義を主として行った。知識の蓄積には果てがない。受講生から日本文化を知ることができて「大学に来た意味があった」と言われた時は嬉しかった。ずっと後になって、鹿笛しかふえの研究をしている高校の音楽教諭から、この当時の私の講義が興味の発端になったと聞き、

音楽大学の10年も意味があったと、心を豊かにしている。

大学は、私の家から公共交通機関で通勤すると2時間以上かかる。これでは子育てと両立しないので自家用車通勤を準備した。それ以来、私の人生に車は手放せないものになった。音楽家の先生たちは瀟洒な外車だったが、私はもちろん国産実用の小型車である。

週に二日は母に子どもを頼み、一日は夫の当番で、子供を保育園へ送った後、大学へ出る。昼に講義が終わると八王子の発掘現場へ行く。一日に100キロも走って努力したが、発掘作業したのは弥生後期の集落、鞍骨山遺跡くらほねやままでで、以後は現場に行き調査の確認をし、相談にのるだけになっていた。

一方、私たち夫婦は30代も終わりに近づき、そろそろ生涯の研究プロジェクトに取り組みなければならないと考えていた。そこで調査地を「アラスカの貝塚遺跡」に定めて科学研究費の海外調査助成金を申請したところ、幸いにも認可される。「作業を手伝って貰うのは、発掘調査に優れている日本人の若者が良い」と考え、八王子プロジェクトで育った人たちに話したところ、信用できる人たちが手伝ってくれることになった。これは夫を代表者とするプロジェクトであるが、発掘調査は二人では出来ないため、八王子の後輩たちの力量に期待が寄せられた。

私たちの計画を他所に、1971年、夫が交換教授として米国へ派遣されることになった。この仕事は、大学で講義をする傍ら家族で現地へ赴き、日本から留学している学生の面倒を見て、翌年日本へ留学を予定している学生たちの相談にのるものであった。滞在先のオベリン大学に音楽学部があったのを幸いに、私は遠慮しながら海外行きのことを大学に相談した。すると理事長と事務長から「大学の方で用意をするべきなので、機会があるならぜひ活かしてください」と快く承知してもらえた。これも音大の特徴なのかもしれないと感謝している。

一年間留守にするための準備や、その後の海外発掘の用意、娘たちの転校の手続きなど、また忙しい日々を過ごし、1971年の夏休みに米国オハイオ州オベリン市での生活が始まった。この町は歴史あるIvyの大学を中心とした人口8000人程の大学町で、パイプオルガンが13台、ハーブシコードなどの古い楽器もあった。長期休暇のときは留学生たちが我が家に滞在して、さまざまな相談にのる。充実の一年でもあった。

その間にも、折角のオハイオ州なので、「サーペント・マウンド」や「ジップ・マウンド」などの墳丘遺跡も見学して歩いた。何処にも小さな遺跡博物館が付属していて、理解を助けたのが心に残っている。



▲国立音楽大学校舎 正面より(1971年)

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葦子先生です。

U レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 148

八幡前若宮遺跡 ～東山道武蔵路の駅家～

田中 信

「水が吹き出たぞ～」

作業員さんの慌てた声が現場に響いた。まさか、昨日まで畑だった土地の真ん中を水道管が通っていようとは、予想だにできなかった。平成5年の秋、こんなハプニングから発掘調査は始まった。

川越市の西の的場。遙かむかしなら、眼前にはゆったり流れる入間川が臨めたであろう台地の縁辺に、八幡前若宮遺跡はある。調査が進むと、この遺跡がこれまでに調査経験のないタイプの遺跡に思われてきた。まず竪穴住居が無い、古代の遺跡なのに。その代り用途不明な穴がたくさんある。そこから掘り出されるのは大量の土師器と須恵器の坏・皿ばかり。そしてわずかながら大型の硯片が見つかる。

「なんだこの遺跡は?」と頭を悩ませていた時、ふと思いついたのが、当時國學院大学の院生であった木本雅康さん(現長崎外国語大学教授)が唱えていた東山道武蔵路ルートだ。木本さんは、歴史地理学の立場から、遺跡で発見された道路跡だけでなく地上に残る道の痕跡や地名、文献史料を駆使して東山道武蔵路のルートを復元してみせた。東山道武蔵路とは、律令国家が定めた官道・七道の一つ、東山道の、その枝道である。律令国家は七道によって全国を行政区分もした。当初武蔵国は東山道の諸国に行政区分されていた。

東山道武蔵路は、平成元年、所沢市南陵中学校の校庭に、両側側溝をもつ巾12mの直線道路、という衝撃的な姿を現し注目を集めた(東の上遺跡第36次調査)。木本さんが復元した東山道武蔵路のルートは、府中の国府から狭山丘陵に突き当たると、丘陵を東へ迂回してから東の上遺跡を通過し、その後ほぼ直線的に新田・足利へ向かう。また途中、川越市の的場・女堀Ⅱ遺跡を通過するとして。それは、女堀Ⅱ遺跡に、推定ルートの向きと一致する中世の大堀と、その大堀に付随し並走する土壘下に古い溝跡を報告書の中に見つけたからだ。木本さんはその溝跡を東山道武蔵路の側溝と考えた。

早速、地図を開いて定規を当ててみた。八幡前若宮遺跡は、所沢市の東の上遺跡と女堀Ⅱ遺跡とを結ぶ直線にぴったり載った。さらに、距離を調べると、八幡前若宮遺跡は国府から30km余りの距離にあり、三十里(約16km)毎に駅家を置くとする「厩牧令」の規定に従えば、国府から3番目の駅家の位置になる。

「八幡前若宮遺跡は、駅家の一部か?」

もしそうだとすれば、その証明は、文字資料の発見にかかってくる。発掘は「文字資料を探せ!」を合言葉に進められた。しかし、掘り出されたばかりの土器片は、土汚れで文字は読み取れない。その役目は土器を水洗いする整理室に委ねられた。そして発見は意外に早く、そして突然に訪れた。

現場で不足した道具を取りに整理室に行ったときのこと。我慢していた用を足して廊下に出ると、整理作業の女性が、「田中さん、そんなことをしている場合じゃないわよ。これを見てよ。」と興奮気味に差し出してきたのが、土器の破片だった。そこには、慣れた筆遣いで「驛長」と書かれていた。



▲「驛長」墨書土器(八幡前若宮)

「驛長(驛長)」は、古代の官道の七道(駅路)に置かれた「駅家」の長のことで、この土器は、驛長専用食器と理解できる。八幡前若宮遺跡が駅家の一部であったことがほぼ確実となった。

律令国家は、中央と地方の間の情報伝達のために七道を設け、早い時期から緊急通信制度として駅制を敷いた。公務の使者である駅使は、駅家で食事・休息・宿泊のサービスや駅馬の供給を受ける。駅家には乗り換え用の定められた数の駅馬が置かれた。この道路は、緊急の情報伝達のためだけでなく軍隊用道路としての機能も併せ持っていたと考えられている。

また、八幡前若宮遺跡では、大型の井戸が見つっている。井戸は、その大きさも注目されたが、「驛長」の墨書土器の発見により、もう一つの古代の文字資料、木簡の発見が期待された。自然と作業員さんの移植を握る手にも力が入る。しかし井戸は掘り下げるほど狭くなる。さらに粘り付く土と湧き出る水との戦いである。そんなとき、井戸の中の作業員さんが「おもしろそうな板が出たよ」と、長さ30cm程の細長い板を井戸底から放り上げてきた。手にして一瞬「木簡か。」と思ったが、木簡に特徴的な紐をかける袂れが無かったので、がっかりしながらも水に浸しておいた。井戸から掘り出した土は、現場で全て水洗いし徹底的に調べたが、とうとう木簡は発見できなかった。

二ヵ月半の調査を終え、全ての遺物を整理室に運び現場を引き上げたその日の夕方、調査を手伝ってくれた東海大学の落合義明さん(現山形大学准教授)と現場の思い出を語りながら木片の水洗いをしていた。

「字だ。」と思わず声を上げた。

埼玉県内2遺跡目の木簡の発見である。それも酒造りに使用した米の量を記録した帳簿木簡という珍しい木簡の発見であった。



▲木簡(八幡前若宮)

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは宇留野主税さんです。

考古学者の書棚

「江戸を掘る 近世都市考古学への招待」

古泉 弘 著／柏書房(1983)

石森 光

江戸東京博物館で、企画展「発掘された日本列島2016」の地域展として、江戸時代を対象とする近世考古学の嚆矢となった記念碑的調査である一橋高校内遺跡を取り上げた「掘り出された江戸の町— 一橋高校遺跡出土資料から」が公開された。1993年の開館時から常設展示質に設置されている地層模型「模型 江戸東京を掘る」を特集し、各地層から出土した代表的な資料が展示ケースに陳列されている。調査の経緯はこうだ。

1975年正月、千代田区東神田に位置する都立一橋高等学校の校舎改装工事中に、多数の人骨が発見される。通報を受けた東京都教育委員会は、近世考古学に造詣の深い加藤晋平氏に依頼し、予備調査によってそれらの人骨が江戸時代の埋葬人骨であり、当地が江戸時代の墓地であると判断される。壁面には長屋や蔵の土台石が覗いており、豊富な地下水によって不朽をまぬがれた更なる埋葬遺構の存在が予想されたため、工事を一時中断し、加藤氏を団長とする考古学専攻生と聖マリアンナ医科大学を中心とした形質人類学の専門家からなる調査団を編成して、わずか40日間という制約の中で本調査を行う事となった。調査によって墓地は江戸時代初頭から中期にかけて掘られており、明暦の大火(1657)と天和の大火(1683)による罹災によって付近の寺院が全て移転した後は、これに代わって町屋が成立していることが判明した。

本書は都立一橋高校内遺跡調査団の一人として調査に関わった著者が、調査成果をもとに発表した江戸考古学としては初めての概説的研究書であり、江戸遺跡の調査に関わる考古学徒・研究者にとってはバイブル的存在であった。江戸遺跡を対象とする近世考古学は、1969年の日本考古学協会における中川成夫・加藤晋平による「近世考古学の提唱」で問題提起がなされて以降、東京都の主導によって発掘調査が少しずつ行われるようになるが、本書が発表された翌1984年以降江戸遺跡の発掘件数は飛躍的に増え、更にバブル景気に後押しされる形で再開発が急速に進められ、東京の地下に埋もれる江戸遺跡は壊滅の危機に瀕する事となる。こうした状況下で都心区の埋蔵文化財行政が徐々に整備され、現在に至るのであるが、本書は江戸遺跡が直面する危機的状況について、逸早く警鐘を鳴らした書といえる。

本書の構成は4章に分けられている。章立ては以下のとおり。

I よみがえる江戸

1 埋もれていた江戸 2 街の移り変わり 3 死者たちとその行方 4 長屋の暮らし

II 庶民の暮らしと道具

1 さまざまな道具 2 飲食と嗜好品 3 装衣と遊び
4 江戸の物質文化

III 考古学からみた東京前史

1 江戸の成立と発展 2 武家屋敷の発掘 3 江戸城の発掘

IV 近世考古学への招待

1 江戸考古学の確立へ向けて 2 江戸の現在と未来

内容について簡潔に触れると、「I よみがえる江戸」では一橋高校地点調査の経緯に始まり、検出された遺構と土層年代から推定される町の変遷について述べられ、「II 庶民の暮らしと道具」では同遺跡から出土した、多様性に富んだ遺物から推測される江戸の物質文化について、「III 考古学からみた東京前史」では旧石器時代から江戸時代に至る武蔵野台地の概要および他の江戸遺跡の発掘調査成果について、「IV 近世考古学への招待」では近世考古学が直面する諸問題と課題について述べられている。

著者は近世考古学において、考古学のみならず「文献史学・民俗学・地理学・分析や測定に必要な自然科学の諸分野」との学際的研究の必要性を訴えているが、近世考古学は遺跡を発掘することによって文献資料や民俗資料からは読み取れない、それまで語られなかった新たな歴史を明らかにする方法論といえよう。

加藤晋平氏は「近世考古学の提唱」発表以前から「中世考古学」の理論的位置づけを行っていたが、近世江戸を考えるには、中世から近世、近世から近現代へと続く時間的・歴史的連続性についても考えなければならない。現在でも近世江戸の考古学は、膨大な資料や情報の蓄積とともに、都市開発と遺跡の保護という厳しい問題に常に晒されている。一方で本書が発表された当時は殆ど語られることの無かった近現代考古学の発展によって、近現代を考古学的に検討する動きが盛んになってきているが、失われゆく近現代遺産の記録・保存に対する取り組みが十分に進んでいるとは言い難い。私が長らく調査に関わってきた日吉台連合艦隊地下壕も、文化庁によって重要な戦争遺跡として文化的価値を認められながら、文化財にも史跡としても認定されず、入口部分や周辺施設を破壊される事となった。江戸遺跡の調査に苦慮した先達の姿を重ね合わせ、より多くの方に問題意識を共有・検討して頂くことを切に願うものである。

最後にもう一編、本書を参考に書かれたミステリー短編を紹介したい。本格ミステリーの旗手・島田荘司の短編集『踊る手なが猿』(光文社1990)に収録された「暗闇団子」である。都立一橋高校から出土した2体の人骨と、架空の資料から構築された「謎」を用いて、考古学的手法のみでは解き明かされない事実を突き止めるという、ミステリー作家としての手腕を遺憾無く発揮した作品といえる。時代考証が徹底してなされており、水の都・江戸の都市景観や地形、当時の習俗の描写が生き生きとしていて、実に読み応えがある。併せてお勧めしたい。

アルカ通信 No.155

発行日 2016年8月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp